

---

原著論文

---

戦死者へ／との旅  
—沖繩戦跡巡礼における〈遺族のコミュニタス〉—

北村 毅\*

Pilgrimage to/with the War Dead :  
Communitas of the War Bereaved of the Battle of Okinawa

Tsuyoshi Kitamura\*

(Received : April 4, 2005 ; Accepted : May 5, 2005)

Abstract

Recently, many articles examining memorial spaces and practices have been published. Most of these works merely emphasized the public meaning of the war dead and considered the political dynamics of representing it. In other words, research in this field has focused little attention on the private meanings of each war dead. The purpose of this paper is to examine the individual memorial practices of bereaved families of Japanese soldiers or brothers in arms around old battlefields in Okinawa. The present research seeks to determine what represents the departed souls of dead soldiers for their families. In addition, this research identifies how the war bereaved re-encounter their fallen relatives in postwar times. For this purpose, I apply Victor Turner's theory of pilgrimage to individual pilgrimages around battles sites ("Senseki-Jyunrei") from the 1950s to the 1960s, and propose a new concept, "Communitas of the War Bereaved", for analyzing battlefield pilgrimages. (*Waseda Journal of Human Sciences*, 18 (2) : 21-36, 2005)

**Key words** : Pilgrimage, Communitas, War dead, War bereaved, Battle site

I. はじめに —問題意識の所在

近年、戦死者の慰霊空間（忠魂碑、戦争記念碑、神社など）、慰霊実践（戦死者祭祀、戦没者追悼式、遺骨収集など）に関する研究は多い<sup>1</sup>。そこでは、戦死者に関する場や実践、記憶がいかにナショナルな次元に回収されるかという、戦死者を巡って展開する表象作用の政治力学について論じられることが、

半ば時流になっているようだ。しかし、岩田重則が指摘するように、それらの議論には、「生活する側が戦死者をみずからのもとへ取り戻すための論理の構築」<sup>2</sup>という視点に欠けている嫌いがある。戦死という「公的な死」の公的な性格について論じることは容易い。それよりも、戦死者の死の掛け替えのなさ（個別性）に含有される、それぞれの死の私性を立ち上げることはできないかという問題設定が、本論の

---

\*早稲田大学大学院人間科学研究科博士後期課程 (*Graduate School of Human Sciences, Waseda University*)

そもその出発点である。

たしかに、川村邦光の言う通り、「戦死者と名乗る者や主張する者」はどこにも存在しない。戦死者は、何者かの表象＝代弁 (representation) の結果立ち現れる存在であり、不在ゆえの在とでもいうべきある種の逆説の中に封入されている。そのような表象力学において、戦死者が現れる (現される) 場所は、「政治的な抗争の場」であり、戦死者について語ることは公的な様相を示す。しかし一方で、川村自身言及することを忘れていないが、「弔い、供養や祭祀を受けて、幾度も回想されて記憶として留められ、ときには物語られ」る戦死者遺族が立つ私的な場所がある。逆言すれば、「戦死者とつながり関わり合う人・場・物、記録・記憶といった、接触したり介在したりする関係や領域を通じて」しか、人は戦死者の個別性に触れることはできないのである。そこで、人は戦死者と邂逅することができる。川村の言を借りれば、戦死者に「否応なく立ち合わせられる」のである。

本論は、戦死者遺族が、それぞれの戦死者に「否応なく立ち合わせられる」場と実践について考察しようとするものである。川村のいう「個別の戦死者と関わり合う場へとおもむくこと、居合わせること」とは一体どういうことなのだろうか<sup>3</sup>。遺族は、どのような場所で、どのように戦死者と出逢い、その死とどのように向き合うのであろうか。

そのひとつの事例として、ある巡礼の旅を取り上げたい。それは、戦死者へと導かれた遺族による巡礼の旅である<sup>4</sup>。1950年代後半から70年代に掛けて、本土出身の沖縄戦戦死者の遺族が、多数沖縄へ戦跡巡礼の旅に出掛けた。もちろん、この営みは、現在も進行中であり、筆者は現時点における戦跡巡礼(や戦跡観光、戦跡巡り)を調査する者でもある。しかし、本論における分析射程は、あくまでも初期の戦跡巡礼に絞られる。

その理由は、何よりも初期の戦跡巡礼において、巡礼的なものがより直截に観察されるからである。敗戦から幾十年と間もない当時、遺族の中に生き続ける戦死者のイメージは濃厚であり、そのかなしみは遙かに切実であった。遺族たちは、戦死者を想いながら戦跡を巡る中で、泣き、叫び、悲哀の感情を露わにした。

遺族たちのかなしみを掻き立てたものは、殺風景

な戦跡の光景であった。1960年代までの沖縄の戦跡の様相は、現在とはあまりに異なる。戦禍によって焼き払われた戦跡地は、樹木もまばらで、剥き出しの石灰岩の地肌を露わにしていた。そこには、「霊域」という形容が似つかわしい荒涼たる光景が広がっていたのである(現在同じ場所は、「沖縄戦跡固定公園」と呼ばれる)。巡礼者は、「霊域」と呼ばれた地に建立された慰霊塔・碑において、無数の遺骨に接し、そこに肉親の姿を重ね見た。そこは、戦死者を、その死の情景をありありと目に浮かべることができる場所であったといえよう。

慰霊塔やガマ(自然洞窟)の中を覗き込めば、そこには、夥しい遺骨があった。1960年代後半に戦跡を巡拝した遺族は、「各慰霊碑共遺骨入れの蓋を開く事が出来、あのシャレコウベが身内に見えてなりませんでした。各慰霊碑の廻りには小さな骨が散らばって居ました」<sup>5</sup>と回想している。少なくとも60年代後半まで、戦跡は遺骨と共にあり、遺族たちは、遺骨に充たされた「塔の中をみながら戦死した我が子、兄弟の名前を大きな声で呼び乍ら泣い」<sup>6</sup>た。

このような「周縁の地」(そして、肉親の「終焉の地」である)を巡った初期の巡礼行と現在のそれが大きく様相を異にすることは言うまでもない。まさにそこは、戦死者と「否応なく立ち合わせられる」場であったのである。

本論では、戦跡という「周縁の地」を巡る過程において形成された遺族同士の濃密な関係性を、「遺族のコミュニタス」と呼ぶ。「コムニタス」(communitas)とは、英国の人類学者ヴィクター・ターナーが提唱した概念<sup>7</sup>であるが、それは、人類学者ファン・ヘネップの通過儀礼論<sup>8</sup>における「分離—境界(移行)—再統合」の三つの段階の内、「境界の状態」に一時的に形成される、平等的かつ非差別的な共同体(性)のことである。そのようなコムニタスの中で、日常の中で固定化された社会秩序や通念は脱構築される。「戦跡巡礼」という限りなく周縁へと向かう旅(沖縄という地理的・政治的・文化的に辺境にある地への旅であり、さらには、俗から聖、生から死への旅である)の渦中で、遺族の間で戦死者を喪ったかなしみが共有・共感されることにより、そこに「遺族のコミュニタス」が現出したのである。戦跡巡礼が、「コムニタスを体験する機会であるとともに、治癒と再生の源であるコミュ

ニタスの根源へ到る旅」<sup>9</sup>（ターナー）であったことを示すことにより、戦死の個別性が立ち現れる瞬間（過程）を看取できることであろう。

以上の理由から、本論の分析の射程は初期の戦跡巡礼に絞られるが、特に戦後最初の団体での戦跡巡礼である北海道遺族の事例を中心に検討したい。北海道は、沖縄戦において、沖縄県を除く都道府県中、最も多い戦死者を出していることもあって、他に先んじて沖縄への戦跡巡礼を行っており、報告・記録の類も充実している。本論で取り上げる事例のほとんどが、北海道遺族によるものであることをあらかじめ断っておきたい。

## II. 戦死者遺族の敗戦後

当節では、具体的な戦跡巡礼の事例に入る前に、遺族をして巡礼の旅へと促す動機たる、彼らがどのような戦後を送ったかについて検討しておこう。

戦後、沖縄戦戦死者の遺族の元に遺骨が還ることはほとんどなかった。俗に「鉄の暴風」と呼ばれるほどの銃砲弾が飛び交った沖縄戦においては、戦死者の遺体の多くが、誰のものか判別できないほどに損傷かつ四散していたからである。

1952年に、沖縄へ政府の遺骨調査団が派遣されているが、国会におけるその調査報告において、戦後肉親の遺骨を回収することができた沖縄の住民は、5%以下とも10%以下ともいわれている<sup>10</sup>。戦場を逃げまどう中で肉親と生き別れ、その行方すら分からない人がほとんどで、仮に戦死場所を知っていたとしても、生存者が収容所生活を終え、肉親の遺骨に目が向く頃には、当然遺体は白骨化しており、戦場に折り重なる遺骨を前にしてもう誰のものか判別しようもなかったのである。そのような身元不明の遺骨をひとつひとつ拾い集め、それぞれの部落に設けられた質朴な納骨所に納めることから、沖縄の戦後は始まった。

ましてや、このような状況下で、本土出身軍人の遺骨が本土の遺族の元に送還されることは、まずありえなかったとあってよい<sup>11</sup>。戦後十年を経過した1955年の時点で、遺族の元に帰還した北海道出身の沖縄戦戦死者の遺骨は、わずかに18体を数えるのみだったという（『琉球新報』1955年6月5日）。現在判明しているだけで、北海道出身者の沖縄戦関連の

戦死者総数は、沖縄県以外では最大の10,787名<sup>12</sup>（平成16年6月23日現在の「平和の礎」の刻銘者）を数えるが、その内の99%以上の遺骨が遺族の元に還ることなく、沖縄の山野に、納骨所の中に埋もれていたのである。

ここで、北海道の遺族の元に戦死者の死がどのように知らされたのか見てみよう。敗戦後の2年間を「今日か明日かと、雨の音、風の音にも心待ちにして」過ごした遺族の元には、戦死の公報が入るよりも先に、「白木の箱」が「突然帰って来た」という<sup>13</sup>。あるいは逆に、戦死公報を受け取った後に、「遺骨箱」が返還されたケースもある<sup>14</sup>。戦死の公報が一枚届いたきりで、結局「遺骨箱」を受け取ることがなかった遺族もいたようだが、大概の遺族の元には、「遺骨箱」が「伝達」されたようである。しかし、いずれにせよ、それらの「遺骨箱」の中には、遺骨はなかった。

一般的に、遺骨なき「遺骨箱」の中には、遺骨の代替物として次のような品々が納められていた。比較的遺骨に近いものとして、戦友等が持ち帰った戦死者の遺髪や遺品、または、激戦地の石や砂（戦死者の魂が宿っているとされた）が入っていることがあった。あるいは、原隊または家族の元に遺された戦死者の遺留品（遺髪や遺爪など）が回収されて、それが「遺骨箱」に納められ、再び家族の元に送り還されたりすることもあった。それすらない場合、遺骨箱の中には、援護当局によって<sup>霊璽</sup>と称された戦死者の名前が記されただけの紙片（遺族はそれを「位牌」と呼んでいたようである）が納められていたのである。

大方の沖縄戦遺族が遺骨箱の中に見たものは、この<sup>霊璽</sup>（位牌）であったようである。当然のことながら、紙切れ一枚を示されて遺骨の代わりといわれても、遺族が納得するはずもなかった。誰もそれを肉親の遺骨と同一視することはできなかった。沖縄戦遺族は、遺骨不在の中で戦後を歩み始めなければならなかったのである。

戦死公報や遺骨なき「遺骨箱」によって告げられた死が、いかに遺族の戦後を重いものにしたか、ある北海道の沖縄戦遺族は、「夫の戦死を知り、張り詰めていた心の支えも、一瞬にして崩れ去り、こんな悲しい出来事があるのかと、初めて知る空虚な日夜が続きました」と書き残している<sup>15</sup>。遺族は、援護

の担当官庁や戦死者と同じ部隊の生き残りに手紙を書き、肉親の「死の様子」を尋ね、なんとか心の平安を得ようとしたが、徒労に終わることがほとんどで、かなしみは増幅されるばかりであった。

そのような戦死者遺族の心理に接近するために、災害遺族の研究が参考になる。精神科医野田正彰は、『喪の途上にて』において、「日航機墜落事故」(1985年)遺族が辿った「喪の過程」(Mourning process)を分析している。事故後、遺族たちが、どのように死者の死を受け入れていったか(あるいは受け入れることができなかつたか)、同書の教示するものは大きいですが、ここでは、遺体に対する遺族の心理についてだけ言及しておこう。

日航機事故の被害者の遺体は、事故現場に散乱し、完全な遺体と対面することができた遺族はほんの僅かであった。遺体が少ししか戻ってこなかった遺族は、その死を受け入れることができず、「現実感の喪失」を長く引きずったまま、日常生活にも困難を来す場合が多かったという。野田は、「遺体の多くを取り戻した家族が、亡くなった人は骨壺に、墓に、あるいは仏壇にいると思えるのに対比して、僅かの遺体しか見付からなかつた遺族が、死者は御巢鷹に眠るという想いが強い」と指摘する<sup>16</sup>。そのような心理が、毎年8月12日の御巢鷹山の尾根への慰霊登山へと遺族を促すのである。

同様、その死を看取することもできず、遺体や遺骨を目にすることもなかつた戦死者遺族にとって、その死を受け入れることは容易ではなかつた。遺族は、肉親が「死んだ」という現実を受け入れることができなかつた。頭で理解しようとしても、心情的に受け入れることができなかつたのである。死者は、遺族の心の中でいつまでも生き続けた。そして、災害遺族と同じように戦死者遺族の心も、自らの心の安寧を求め、肉親が斃れた(そして、眠っている)沖縄の地へと向けられた。沖縄戦遺族もまた、戦死者との何らかのよすがを求めて、戦死者を慰霊する巡礼の旅に促されていったのである。

### III. 戦後初の沖縄戦跡巡礼

戦後初めて、戦跡巡礼を目的として団体で沖縄を訪れたのは、北海道の遺族団であった。沖縄戦で膨大な戦死者を出した北海道では、戦後早くから慰霊

巡拝団の派遣が求められていた。そのような声に促されて、1954年3月、北海タイムス社主催の「第一回沖縄巡拝と慰霊の“北霊碑”建立団」(以下、「北海道遺族団」などと省略)が結成された。北海道の沖縄戦遺族は、当時4万人余りといわれたが、代表団への参加は30人以内と限定されたため、各市町村において選ばれた、ほんの一握りの遺族しか参加することができなかつた。まさに、参加できた22名の遺族は、北海道の沖縄戦遺族の代表として、在郷遺族の切なる願いを一身に背負って、沖縄へと旅立ったのである。

参加者は、遺族代表22名、北海タイムス関係者3名(内2名も遺族)の合計25名。沖縄滞在は4日間に満たなかつたが、列車と船を乗り継いで往復したこともあり、3週間近い長旅となった。沖縄に滞在中は、中南部の戦跡地を巡拝し、北海道から運んでいった資材で、沖縄側関係者の協力の下で「北霊碑」を建立し、除幕式と慰霊祭を執り行っている。「北霊碑」は、沖縄住民以外の手によって建立された初めての慰霊塔・碑であり、各都道府県による慰霊塔の嚆矢となるものであった<sup>17</sup>。

敗戦から10年も経ていない1954年当時、北海道からの沖縄への渡航は今日では想像もつかないほどの難事業であった。当時、一般人の沖縄への渡航は、現地に身元引受人がいて、さらにその身元引受人が渡航者の滞在費用を保証してくれる場合に限られていた。足掛け3年の交渉の末、渡航申請の許可が下りるまでには到ったが、現地滞在費用のドルの持ち出しが認可されず、遺族団は、滞在中の「無銭旅行」を余儀なくされたのであった。

琉球遺族連合会と琉球新報社が身元引受人となり、滞在費用を負担してくれたため、どうにか派遣は可能になったが、経費削減のため沖縄滞在中も船中に寝泊まりすることになった。沖縄側の厚意により、現地滞在費用は不要になったとはいえ、往復の船賃など38,500円の旅費が必要だった。大卒銀行員の初任給が5,600円だった時代、この経済的負担は、遺族にとって大きかったようだ。さらに、参加者は、出発前に各種の予防注射の接種を義務づけられ、入国時には検疫官によって厳しく注射の証明書を点検された。現地滞在中は、四六時中、米軍の監視下にあったという。

以上のような艱難をものともせず、遺族たちは、

「肉親ともなれば息子や夫が何処でなくなつたかこの目でみたいし、この手で一本の線香でもあげたい」(『琉球新報』1954年4月2日、以下、西暦年を省略)、「遺骨の幾らかでも、探すことができれば。たとえば土でも石でも持ち帰るつもり」(『沖繩タイムス』3月29日)という願いを果たそうとした。これより後、1960年代に沖繩戦跡巡拝に参加したある遺族は、「死んでもかまわないと決心して行って来た」<sup>18</sup>と回想しているが、それは巡礼遺族の共通した心情であったことだろう。ましてや戦後9年目、沖繩は遠く異国の地にあり、平均年齢55歳<sup>19</sup>の遺族たちにとっては、最後の機会となるかもしれなかった。以下、当時の『北海タイムス』、『琉球新報』、『沖繩タイムス』の記事を参照しつつ、戦後初の戦跡巡礼を再現してみることにしよう<sup>20</sup>。

### 1. 「北霊碑入魂式」から沖繩到着まで

北海道遺族の巡礼の旅は、3月11日午後、札幌顕徳神社(現札幌護国神社)で行われた「北霊碑入魂式」に始まるといっていいだろう。四百余名の遺族と関係者が神殿を埋める中、生花や真榊が供えられた祭壇の横には、「北霊碑」が置かれ、各関係者の「入魂の詞」が一通り読み上げられた。

3月25日午前10時、札幌駅前に、遺族代表団と見送りの家族、沖繩戦死者遺族、関係者約600名が集まり、壮行式が挙行された。北海道知事、札幌市長などの壮行の辞が読まれ、各方面から慰霊祭のための花輪や切麻(きりぬぎ)などが託された後、代表団の団長は、「少しでも多くの遺骨を探し、持ち帰って来ます」(『北海タイムス』3月26日)と辞を述べたという。さらに、在郷遺族によって「霊前」(供物)が代表団に託され、「一握の砂でも持ち帰って欲しい」という見送りの遺族の涙声を背に、午前11時、札幌発急行は、横浜へと発ったのである。

26日横浜に到着し当地で宿泊した代表団は、翌日午前に煩雑な出国手続きを終えてから白山丸(4,351トン)に乗船し、午後5時、「北霊碑」と共に横浜港を出港した。白山丸は、30日午前9時、神戸港に寄港。下船した一行は、観光バスに乗って神戸市内を観光している。それから、同日午後6時、神戸を出港し、鳴門海峡を経て、土佐沖、九州南方沖合を通り沖繩へ向かって南下していった。沖繩に近づくに連れ、遺族たちは、弟を沖繩戦で喪い、かつ沖繩

戦の「生き残り」でもあった村瀬勇二(当時36歳、以下遺族の名はすべて仮名)から沖繩戦「懐古談」を聞いたり、横浜から乗船した「戦争中沖繩にいた人々」と「戦争中の模様」を話し合ったりして、戦死者への思いを募らせていった。

4月1日午後11時には、戦艦大和の沈没地点の近くを通り、「花輪をなげて一同めい目」したと伝えられる(『沖繩タイムス』4月2日)。

4月2日7時半、代表団と北霊碑を載せた、白山丸は那覇港に入港した。長男と次男を沖繩戦で亡くした滝川ツル(当時57歳)は、「沖繩の島陰」が見えてきた時の感慨を「どんなに苦しんで、兄弟が死んだのやら思いめぐらすだけで胸がつかえて」と語っている(『沖繩タイムス』同上)。そして、入国手続きを済ませ、10時半にタラップを降りた一行は、埠頭で、琉球遺族連合会(現在の沖繩県遺族連合会)<sup>21</sup>、琉球新報社、琉球政府や那覇市の関係者などによる盛大な歓迎を受けてから、琉球新報社が調達したバスに乗り込み、南部戦跡へと向かった。

### 2. 南部戦跡巡礼(滞在1日目)

北海道遺族団は、まず、「南方連絡事務局那覇日本政府南方連絡事務所」(現内閣府沖繩総合事務局)と「琉球政府」をそれぞれ訪れ、関係者と懇談してから、南部戦跡へと向かった。一行を乗せたバスは、琉球遺族連合会の金城和信(当時事務局長、後の会長。「ひめゆりの塔」の建立者でもある)の案内により、①「白梅之塔」(1947年建立)、②「雨宮中将戦没の跡」(建立日不明)、③「萬華之塔」(1951年)、④「ひめゆりの塔」(1946年)と、現在の糸満市の行政区域にある慰霊塔・碑を順々に巡っていった(図1参照)。いずれの塔も、米軍に追いつめられた日本兵が多数戦死した地に建っており、②と③には多数の北海道出身兵士が合祀されている。

すでに、新聞等で、北海道慰霊団の来訪が報道されていたため、通りがかりの村々では、「村民が飛び出してきて手を振って、遠来の客を歓迎した。遺族団が、慰霊塔・碑を参拝するためにバスから降りるやいなや、集まっていた地元の住民が群がるようにして、戦争当時の辺り一帯の様子を説明したり、知古の北海道出身将兵の戦死の状況について語ったりする光景が見られた」(『北海タイムス』同上)。三和

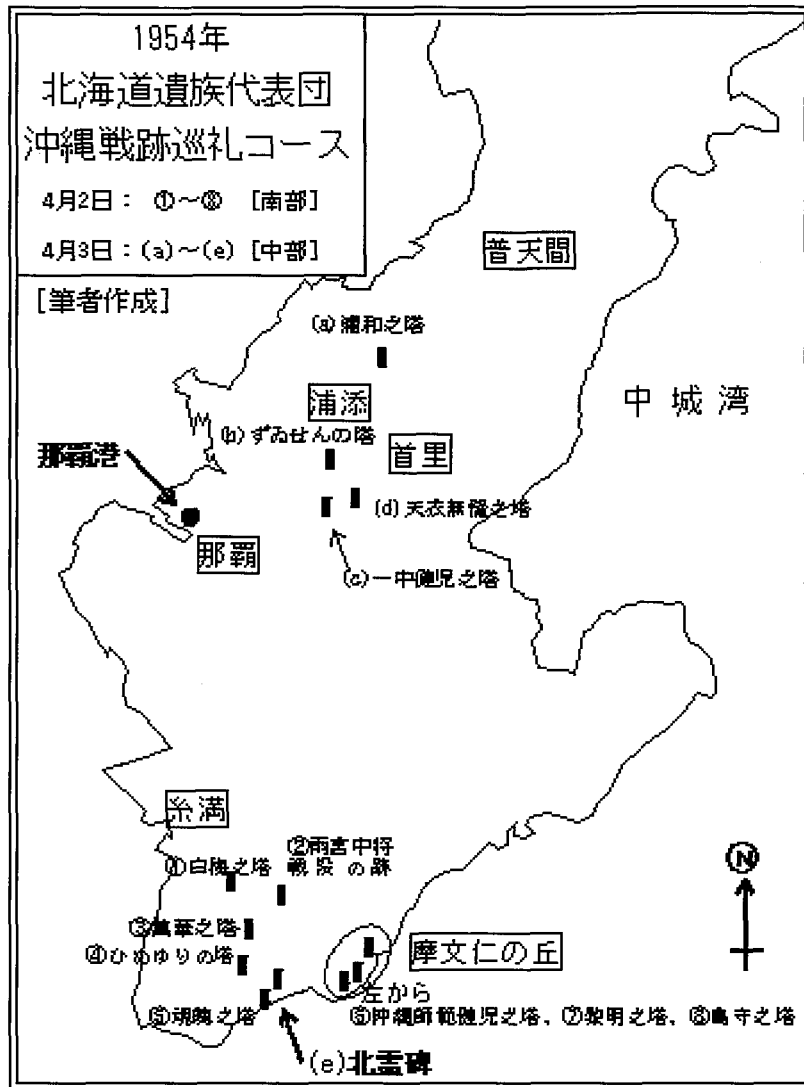


図1

村（現糸満市）からは黒糖、菓子などの「接待」があり、三和村の住民からは、無料で「仏花」が寄せられた（『沖縄タイムス』4月3日）。

昼食後、慰霊団は、⑤「魂魄之塔」へと向かった。魂魄之塔は、1946年2月、金城和信村長以下、真和志村民の手によって建てられた、沖縄住民の手による戦後初めての慰霊塔である。合祀者数三万五千は、各慰霊塔中最大であり、実質的な沖縄県民の慰霊塔としての位置を担ってきた。当時、魂魄之塔の納骨所の入口からは、多数の遺骨がひしめいているのが見えた。その様子を覗いた、遺族のひとり、4月2日夜に開かれた『琉球新報』の座談会で、「私の子供達も居るのかも知れないと思つて大声で叫びたいショックを受け、涙がポロポロおちて仕方ありませんでした」（『琉球新報』4月3日）と語っている。遺

族は、そこに肉親の姿を重ねたのである。

1日目の行程の最後に、遺族団は、摩文仁の丘へと向かい、⑥「沖縄師範健児の塔」（1946年建立）、⑦「黎明之塔」（1952年）、⑧「島守之塔」（1951年）を参拝した後、白山丸へと帰船した。

### 3. 中部戦跡巡礼と北霊碑慰霊祭（滞在2日目）

白山丸に船中泊した慰霊団は、翌日4月3日早朝、中部戦跡巡礼に出発した。一行は、まず、真和志市（現那覇市）寄宮にあった真照寺に立ち寄り、沖縄戦死者の菩提を弔った。それから、浦添村（現浦添市）に入り、(a)「浦和之塔」（1947年建立）を詣でた。同塔付近は、沖縄戦中もっとも熾烈な戦闘が展開された地域であり、同地での戦闘に参加した村瀬勇二が当時の戦況を説明した。村瀬は、錆びついた鉄か

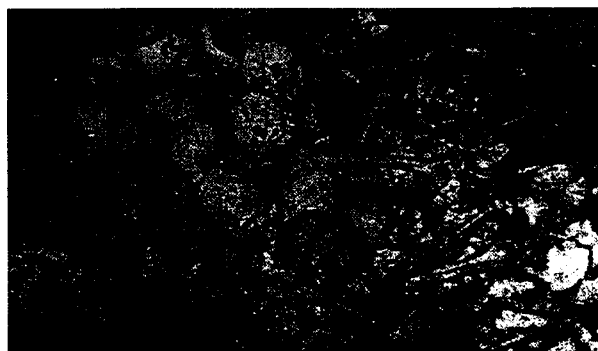


図2 「浦和之塔」下の納骨堂  
[『北海タイムス』4月8日]



図3 戦跡地の石を拾う遺族  
[『北海タイムス』4月5日]

ぶとがかぶせられた、卒塔婆が数多く立ち並ぶ「青草茂る古戦場」に立ち、感極まって涙したという。

同塔の真下には、戦中日本軍が立てこもった洞窟があり、その中に、地元の住民によって集められた遺骨を収めた、ブロック造りの納骨堂があった。そのうずたかく積まれた頭蓋骨の山に、「目を蔽って嗚咽にむせ」んだ一行は(『北海タイムス』4月8日)、いつまでも去りがたそうに、壕内の小石を拾い集めていたという(『琉球新報』4月4日)。

11時半、浦和之塔を後にした一行は、首里へと向かい、当時はいずれも首里に存在した三つの塔、(b)「ずるせんの塔」(1948年建立)、(c)「一中健児之塔」(1950年)、(d)「天衣無縫之塔」(1951年)を巡拝した。この付近での戦死者の遺族が多かったため<sup>22</sup>、(d)の前で、遺族たちは「泣きながら塔に水をかけ手で塔の石をなぞて『長い間ご苦労だったねえ』と生ける人に呼びかけるように」碑に接していたという(『北海タイムス』4月8日)。

次いで、一行は、沖縄民政府立首里博物館(現沖縄県立博物館)に入り、戦災を逃れることのできた



図4 最初の北霊碑(1964年頃)  
[清水幸一氏提供]

「古文化財」を見学した後、昼食を取り、建立されたばかりの(e)「北霊碑」へと向かったのである。

4月3日午後2時50分より4時5分まで、「北霊碑」<sup>23</sup>前にて、その除幕式並びに慰霊祭が執り行われた。参列者は、北海道からの25名を始めとして、琉球遺族連合会・琉球政府・婦人連合会等関係者、一般島民、約400名(『琉球新報』では、約百余名)を数えたという。北霊碑は、黒白の幔幕に覆われ、その台座には、遺族が郷土より持ち寄った供物(写真、手紙、煙草、菓子など)、花輪、沖縄関係者から寄せられた黒糖、泡盛、バナナ、トマト、パイナップル、さつまいも、サトウキビなどが、所狭しと並び立てられていた。

式は、3人の僧侶の読経によって開始された。2時55分、読経の声の中、北海道遺族の女性3人の手によって、白い幕が静かに引き下ろされ、碑の全容が立ち現れた。まず、北海道沖縄遺族会長の弔辞が読み上げられた。会長は、「あなたの母が尽きることなき愛情をこめて作ったお菓子があなたの前にあります、生活苦にあえぐあなたの妻がつくつた花輪も」と、声をうちふるわせ「生ける人に語るよう」に語りかけ、参列者の涙を誘ったという(『琉球新報』4月4日)。続けて、北海道知事と北海タイムス社社長の祭文が代読された。さらに、日本遺族会会長以

下、各遺族団体の関係者の弔辞が読み上げられた。

ついで、沖縄側関係者の弔辞が代読された。最後に、沖縄婦人連合会副会長が、戦死者に向かって、「思う存分語つて下さい、お声をお聞かせ下さいませ」と、「おのが生ける肉親にささやきかけるごとく」語りかけると、一同涙に包まれたという（『北海タイムス』4月7日）。

最後に、参列者の焼香が行われ、北海道沖縄遺族会長の挨拶で慰霊祭が締めくくられた。終了後、遺族たちは、「思いを永久に」と、北海道より持ち寄ったスズラン、透かし百合、オンコの苗木を北霊碑の周辺に植え、一人一人碑前で記念写真を撮ってから、在郷遺族から委託された「思い出の品々」（遺品？）を碑中に納め、午後5時慰霊塔を後にした（『琉球新報』4月4日）。

午後6時より、北海道遺族団と沖縄側関係者（琉球政府副主席・社会局長、琉球遺族連合会関係者他）の懇談会が、料亭「ミス沖縄」で開かれた。郷土料理と琉球舞踊がふるまわれ、双方から隠し芸が飛び出す盛況の中、散会したという（『沖縄タイムス』4月4日）。

#### 4. 縁故地巡礼（滞在3日目）

4月4日、遺族団は、三つの班に分かれてトラックに分乗し、肉親の戦死地や、肉親が祀られている慰霊塔・碑を少人数で参拝した。

沖縄仏教会藤井深忍が案内するトラックには、5遺族が乗り込み、浦添、西原、与那原、首里など、「それぞれ肉親が踏んだ土を求めて行脚」した。次男を前田（浦添市）の戦線で喪った遺族は、付近の家々を訪ね、「もしや我が児の消息を知っているのではないか」と問い合わせていたという。その熱心な姿に胸を打たれた地元の住民は、「せめて前田の土に咲いた紅ツバキでもお持ち帰りになり、仏前にそなえて下さい」と庭木を手折ったと伝えられる（『沖縄タイムス』4月5日）。

別のグループで、戦跡を巡った遺族は、息子の戦死者場所である「新垣三界の碑」を詣で、そこで「息子が齒にうえていたような銀冠」を発見し、「九年も夢にえがいた子供に会ったような気がし」たと語っている。さらに、地元住民に戦死者の写真を見せたところ、「戦前よく見かけました」との応えを得、喜んで（『沖縄タイムス』同上）。

このような個人や家族単位、小グループで行われる巡礼形式は、一般に「縁故地巡拝（参拝）」と呼ばれ、大概是集団での戦跡巡礼の翌日に設定され、戦死者と所縁の深い戦跡地（戦死場所や、その近くの慰霊塔・碑）が回られる。遺族たちは、比較的自由に行動できる「縁故地巡拝」の機会に、個別に肉親に関する情報を尋ね歩き、その痕跡を探し求め、「息子が齒にうえていたような銀冠」の中にまで戦死者の姿を垣間見たのである。

#### 5. 北海道への帰郷

以上のような日程を消化し、5日午後3時、北海道遺族代表団を乗せた白山丸は、沖縄関係者の見送りを受け那覇港を出港した。遺族団は、様々なお土産を携えて帰路についた。琉球新報社からは「魂魄之塔域内の土」が贈られた。そして、何よりも、遺族団にとって貴重だったのは、北海道将兵の消息を伝える品々（遺骨や遺品、戦死者の戦死の状況などが書かれた沖縄住民からの手紙など）であった。

北海道遺族団の訪沖が報道されるやいなや、地元の新聞社には、戦中北海道将兵と関わりがあった沖縄住民から、北海道将兵の「消息」（戦死の状況）を知らせる手紙が多数届けられた。そして、滞在中には、沖縄住民が繁く琉球新報社や遺族団の元を訪れ、その最期の（あるいは生前の）様子や遺骨の所在を語り伝えたのである。中には、戦死者から預かった遺書や遺品（印鑑、写真、手紙など）を携え訪れる者もいた。そのような情報は、一枚の戦死公報で死亡を告げられただけの（あるいはそれすらない）遺族にとって、何よりもの土産になったのである。

4月8日午後2時、白山丸は横浜港へと帰港し、下船後バスに乗って東京へと向かい、上野駅前宿舎に宿泊した。以後、一行は、5班に分かれて、長野や京都にあるそれぞれの菩提寺に参詣したり観光したりしてから、14日午前6時に青森に集結し、急行に乗って、午後六時に札幌に帰郷した。多数の関係者や遺族が出迎える中、代表団は、白木の箱に収めた遺骨をかかえて電車を降りたという。続いて、駅前広場で帰国報告式が行われ、とりあえず遺骨と遺品は札幌の西本願寺に安置された。

17日午後3時過ぎから、札幌西本願寺別院にて「戦没者慰霊追悼会」が行われた。『北海タイムス』誌上（4月10日）には、「戦没者の消息と遺品」が掲載さ



れ、所縁の遺族が続々と名乗りを上げていた。そのような中、全道から500余名の遺族が集まり、正面の仏壇に捧げられた遺骨や遺品を前に、関係者の追悼の辞が読み上げられた。身元の判明している遺骨や持ち主が判明している遺品が遺族へと手渡され、慰霊団代表の報告が行われ、追悼会は終了した。このような作業を持って、戦跡巡礼の成果は、北海道中の沖縄戦遺族へと還元・共有化されたのである。

#### IV. 遺族のコミュニティ

青木保は、「御嶽登拝巡礼」を分析した「現代巡礼と日本文化の深層」の中で<sup>24</sup>、現代における巡礼現象を、「現代社会の苦しみの個人レベルでの反映であり、その個人によるドラマチックな顕示であり、『自己覚醒』と『自己確認』の儀礼であって、『自己』のドラマ化を通しての“治療”である」<sup>25</sup>と論じている。まさに、戦跡巡礼も、巡礼者自身が自己を解放し、提示し、覚醒するプロセスであった。

ここでは、同様の観点から、戦跡巡礼者にとっての「自己覚醒」や「自己確認」とはどのようなものであったのか考察したい。そのためにまず、ヘネップの通過儀礼論、それに則ったターナーの巡礼論に従って、前節の事例を「分離」「境界（移行）」「再統合」の儀礼の過程に位置づける。次いで、前節の事例に加えて、1950年代から60年代に掛けて行われた戦跡巡礼の記録（感想文集等）<sup>26</sup>を補足的に参照しながら、巡礼の「境界状態」（リミナリティ）に特徴的な「死と再生」のモチーフを探っていくことにしよう。

##### 1. 戦跡巡礼の儀礼の過程

###### ① 「分離」の過程

まず北海道遺族は、札幌駅前の広場で行われた壮行式によって、それぞれが属している日常世界から切り離された。一般的に、戦跡巡礼における「分離の儀礼」（「壮行式」や「結団式」と称される）は、駅や空港といった日常空間から旅空間への境界領域で行われるか、または、神社（護国神社、靖国神社）などの聖域で行われることが多い。前節の事例においても、札幌顕徳神社において、その前段階ともいえる「北霊碑入魂式」が執り行われている。境界的な場で行われた「分離の儀礼」によって、彼らは、日常の時間・空間から儀礼的に解放され、非日常

の時間・空間へと移行していくことが可能になったのである。

とはいえ、北海道遺族団の日常からの切り離しは、札幌駅での壮行式だけで完了したわけではない。確かに遺族たちは、壮行式によって故郷と象徴的に分離されることになったが、非日常への移行は、横浜港での煩雑な渡航手続きや関係者による「五彩のテープ」が飛び交う波止場での見送りなどによって、経過的に果たされていったと考えられる。

ターナーは、『象徴と社会』において、「巡礼センターは、社会の中心に位置している首都、州都、そのほかの政治—経済上の拠点とはちがって、中心から隔ったところに存在している。こうした周辺性は、通過儀礼の境界状態における空間的隔離にみられる特色と同じもの」<sup>27</sup>であると述べている。巡礼者は、当時アメリカの施政権下にあり複合的に周縁化されていた沖縄へと漸次空間的に「隔離」されていたのだが、さらに時間的に「隔離」されていたことにも触れておかなければならない。遺族たちは、横浜から沖縄までの「840マイル」の船旅の中で、沖縄戦に関する書物を読んだり、沖縄戦体験者にその体験談を聞いたりといった作業を通して、日常の時間軸から非日常の—戦場の—時間軸に自らを晒していった。このような戦死者を想い、戦死者と共に戦場に立たされる時間意識の構築を経由しながら、次の境界の状態への準備が段階的に行われていったのである。

###### ② 「境界」の過程

戦跡における巡礼というリミナリティの中で、巡礼者は、日常世界（俗世）におけるあらゆる支配原理や社会的ステイタスから隔離され、「遺族のコミュニティ」を経験した。彼らは、同様の境遇、同質のかなしみを紐帯として、強固な仲間意識と平等意識を現出させたのである。巡礼者は、「遺族のコミュニティ」において、あらゆる日常における社会的ステイタスを後景化し、他の何者でもなく、肉親を亡くした「遺族」に自らの存在を特化させる。逆言すれば、「遺族」というひとつのアイデンティティーだけが捨選択され前景化されるのだ。ターナーがいうように、境界状態においては、「社会構造は取り除かれるのではなく単純化され、特殊でなしに普遍的な関係が強調されるようになる」<sup>28</sup>。

この「遺族」という「単純化」され、かつ「普遍化」された関係性は、北海道側の「遺族」の間においてだけではなく、沖縄側の「遺族」との間にも共有されたものであった。県民の4人に1人が戦死し、誰もが何らかの形で「遺族」であった沖縄の人々にとって、北海道遺族のかなしみは他人事ではなかった。同じ戦争で肉親を喪った同士として、彼らは「遺族のコミュニタス」を共有する者であった。次の、北海道慰霊団を案内した金城和信の談話から、沖縄の遺族がどのような思いで本土遺族に接していたかが伺われよう。

飛び散った将兵の血と肉はどうなったんだ。みんな沖縄の土となったんだ。私は南部の戦跡を案内する時も、自分が、踏んで立っているこの土も将兵の血や肉だと思って足がむずむずするんだ。そういう気持を内地から来られる観光団の方々に解ってもらえるのは難しいことだ。しかし、遺族の方々なら解ってもらえる<sup>29</sup>。

さらに、「我々遺族や、(遺族会)青年部はどうだ。何か計算があるかね。あつてはいかんし、ある筈がない。真心から歓迎し、英霊を慰めに来たのだと、心からそう思い迎える。それが、あり方だね」(括弧内引用者)と語る金城にとって、遺族同士の関係とは、「策略もかけ引きもない。損得の計算などありえない」ものであった<sup>30</sup>。戦跡巡礼がもたらす、「遺族のコミュニタス」とは、このようなある種の超俗の価値観によってなり立っている。

この戦死者を紐帯として結ばれた強固な同胞意識こそが、沖縄側の遺族による手厚い無償奉仕を支えていた精神的背景であった。琉球政府を訪問した遺族団に対し、比嘉秀平主席が、「私も戦争で二人の子供と両親及び姉を失った遺族の一人で思いは皆さんと全く同じ」(『沖縄タイムス』4月3日)と語りかけたと伝えられるように、沖縄の人々と北海道遺族団は「遺族」という地平で繋がりが得たのである。

さらにいえば、この「遺族のコミュニタス」の成員は、生者だけではなかった。死者—戦死者—こそが、遺族同士を結びつけた縁<sup>えにし</sup>であった。通常人間関係は、生者同士の繋がりによって構築されるものであるが、この共同体(性)の機縁・所縁は、死者なのである。「遺族のコミュニタス」とは、死者という

周縁=余白 (margin) の中に描き込まれ、はじめて可視化される様態なのだ。

そのような遺族という存在にとって戦跡巡礼とは、四国遍路が弘法大師との「同行二人<sup>どうぎょうにん</sup>」といわれるように、戦死者との道行であったといえるだろう。つまり、お遍路が弘法大師の足跡を辿っていくように、戦跡巡礼者は、戦死者の跡(足跡であり痕跡)を辿ったのである。遺族は、戦死者が死へと至った道程を共に歩きたいという思いに促されて、死者の歩いた(であろう)道を辿り直し、そこに死者の痕跡を探し求めた。遺族は、戦死者の死を看取ることのできなかった悔恨を、その死への道程(戦死者の戦跡)を辿り直すことで解消しようとしたのである。戦死者の遺影(軍服姿の写真)や遺品を携行しながらの旅路であったことから、そこに、「同行二人」の思いが込められていたことが理解できよう。

遺族にとって、戦跡とは、単なる「戦争のあった跡」(広辞苑第五版)ではなかった。そこは、死者が死に到るまで感じたであろう、痛み・苦しみ・かなしみを想像する作業を通して、戦場を追体験する場であった。事後的な「死の看取り」ということでもできるだろう。その過程で、遺族は、戦場の(=死者の)時間・空間を経験するのだ。

慰霊塔・碑を巡りながら、遺族は、そこかしこに戦死者の影を追い求め、その死への道程を辿っていった。遺族団に同行した北海タイムス記者が、「車窓をかすめるあのガジュマルのあの木陰、このサトウキビ畑のこのあたり、ちょうどこの太陽と同じ熱さに照らされて本道出身の将兵がサトウキビのつゆをすすりながら、黙々と死んでいったのだろうか」(『北海タイムス』4月5日)と記しているように、巡礼者は、現在の光景の中に家族が斃れた戦場を重ねたのである。与座岳(糸満市)を望んだ地で、息子二人を沖縄戦で喪った滝川ツルがバスの窓から身を乗り出しながら、「あの山の上で私の息子が砲撃観測をしていたのです」と叫んだというように、目に入る光景のひとつひとつが、戦場に、そして、そこに立つ戦死者に直截につながっていったのである。

### ③「再統合」の過程

以上のような巡礼空間の中に現出した、「遺族のコミュニタス」の中で、非日常の時間と空間を経験した遺族たちは、ゆるやかに日常の時間と空間に回帰

していく。

沖縄を発った北海道遺族たちは、そのまま真っすぐに故郷に戻ったわけではなかった。その帰路において、京都や長野での観光を経由してから故郷へと向かっている。そのような観光体験は、非日常から日常、聖から俗、死者の世界から生者の世界への急激な変転を緩衝するバッファとなるものであったと考えられる。山折哲雄がいうように、「巡礼の『還路』は聖なる中心点からの弛緩した退行であり、遊戯、遊蕩の街区を通過していくことによってしだいに世俗的な身心を獲得する『俗』への回路」<sup>31</sup>なのである。

そして、北海道に帰還した遺族たちは、解団式(報告式)によって日常の世界へと完全に再統合された。結団式と同様、一般的にこの「再統合の儀礼」は、駅や空港といった境界領域や、神社で行われることが多い<sup>32</sup>。さらに先の事例では、寺院での「追悼会」において、遺骨・遺品の伝達や巡礼の報告が行われ、在郷遺族に巡礼の成果が分有されたのは、前述した通りである。

## 2. 戦跡巡礼の構造

巡礼者に、戦死者の存在を身近に感じさせたのは、戦跡に散在する遺骨の存在であった。当時、慰霊塔の多くは、塔内、または併設の納骨所や近隣のガマの中に、近辺で亡くなった人々の遺骨を多数収納していた。中でも、「魂魄之塔」(合祀者約三万五千)や「萬華之塔」(約一万九千)の納骨所にぎっしりと詰まった遺骨が与える衝撃は計り知れないものが



図5 萬華之塔の納骨所(1964年頃)  
[清水幸一氏 提供]

あったようだ。前述の遺族団の団長は、現地での座談会で、「魂魄之塔のフタを開け受(ママ)時、後頭部をズキンとくるものを感じ、その気持は筆舌では現わせない」と語っている(『琉球新報』1954年4月3日)。現在では、どちらの塔においても納骨所の入口は固く閉ざされており、中を見ることはできない<sup>33</sup>。

1964年12月、北海タイムス社主催の慰霊巡拝団に参加した山本君枝は、萬華之塔を訪れた体験をこう書き記している。「私の息子は萬華の塔に祭(ママ)られているのですが、大きな塔ですから後から石を積んで、その上にのぼって中をのぞいて見るのですが、人骨がいっぱいあって、その上に頭蓋骨がのせてあるのですが、そのサレコウベが、自分の息子の顔に見えてくるのです」さらに、山本は、老母にその中を見るよう促した。

私が石を積んであげるから、そして体をささえてあげるからと云つて、おばあちゃんを支えていますと、おばあちゃんは泣きだしましたので、私はおばあちゃん、遠慮なく大きな声で泣けるだけ泣きなさい、腹いっぱい泣くと、少しは気持のおさまるものだからと云いました所、おばあちゃんはもうここから離れたくない、この骨の少しでも持って帰れるものならと云うのです。<sup>34</sup>

このように、当時の慰霊塔・碑は、淡々と巡回する観光地ではなく、バスが止まる度に慟哭や涙に満ちた「戦死者との邂逅の場」と化した。質朴な納骨所の中に数多の遺骨を見て、巡拝遺族は大きな衝撃を受け、無言の遺骨を自らの縁故者と重ね、その場をそれまで望み得なかった「墓所」として死者との対話を行ったのである。

それでは、戦跡巡礼者は、慰霊塔・碑において、どのような「境界の儀礼」を行ったのだろうか。そこで、どのように戦死者と出逢ったのであろうか。

遺族たちは、郷土の水、植物(例えば、スズラン、透かし百合、オンコの苗木)、石、果物、菓子、煙草、酒類、地元の名物・特産品(例えば、昆布)など、戦死者の故郷にゆかりの深いお供え物<sup>35</sup>を多数携えてくる。中でも遺族がもっとも心をこめるものは、戦死者の好物だった食べ物だろう。例えば、北海道遺族団の滝川ツルは、「二人が好きだった国のリンゴ



図6 北霊碑前に花嫁人形を供える遺族  
[『北海タイムス』1964年12月12日]



図7 遺影を抱く花嫁人形  
[清水幸一氏 提供]

やコンブで包んだお菓子「エゾの香り。」(『沖繩タイムス』4月2日)を持参して碑前に捧げた。他に、戦死者の遺影や遺品など戦死者を直接に想起させるものも持ち寄られることが多い。あるいは、在郷遺族や死没した家族の写真を携行する者も少なくない。戦死者が祀られている慰霊塔・碑、または、戦死場所である壕の前では、以上のような多種多様な供物が並び立てられ、慰霊の儀式が行われるのである。

そのような戦死者供養の儀式において、花嫁人形が供えられ、冥婚儀礼が行われることも多い。1964年12月の北海タイムス主催の慰霊巡拝団に参加した遺族4人は、それぞれが持参した花嫁人形を供え、北霊碑前の慰霊祭にて巡拝団団長を仲人として冥婚儀礼を執り行った。遺族は、ウェディングドレス姿の花嫁人形や「角かくしに本物そっくりのカンザシをし、文金島田の振りそで姿きたみの花嫁人形(「北海タイ子」と命名された)に戦死者の遺影を抱かせ、「ホラ、これがお前のお嫁さんだよ。二十年もさびしかっただろうネ」と涙ながらに語りかけたという<sup>36</sup>。前節の事例でも、冥婚儀礼こそ行われなかったが、結婚せずに「年若で散つた兵士たちのメイ福を祈る」ために、「青春の香りのこもつた〈乙女ツバキ〉が捧げられている(『沖繩タイムス』4月3日)。

それらの供物はいずれも、戦死者の死の間際の願望(「水が飲みたい」、「故郷に帰りたい」、「家族に会いたい)を表象=代弁するものであり、戦死者がやりのこしたこと(「結婚式をしてやりたい)を儀礼

的かつ代理的に果たそうとするものであった(後者は生者の願望でもある)。これらの生者と死者の濃密な紐帯を象徴的に表す品々を介して、遺族たちは、死者との対話を行い、死者の存在を故郷へとつなごうとしたのである。生者に対するがごとく遺族は、慰霊塔・碑に語りかけ故郷の水をそそぎながら、その末期の飢えと乾きに思いやり、郷土から持参した植物を植え、彼我の、彼岸と此岸の距離を埋めようとした。いわば、供物を通してその場に故郷北海道が架空されることによって、生者と死者が架橋された。納骨所の前に「千羽鶴」を供えた、ある遺族の想いは次のように説明される。「どうかこれに乗つて故郷に一度帰つて来て下さいと祈りうしろ髪ひかれる思いでその場を立去つた」<sup>37</sup>

このような儀礼の過程を経て、慰霊塔・碑は、死者の依代となり、遺族はそこに戦死者の存在をはっきりと感じたのである。彼らは、仏壇や墓前に対するように、慰霊塔・碑の面前で、死者に向かって語りかけた。「塔の前にすわって父に対面の挨拶をした時、見憶えもない父を慕う気持と、なつかしいという気持が私の胸一杯に迫りました。そして父の大きなやさしい胸に抱かれたような、安心感が私を包んだ。(略)長い間私の心の奥底に潜んでいたすべてのものがドツとはき出されたような気持でした。(略)次から次へと感激の新しい涙が頬をつたうのをどうする事も出来なかった」<sup>38</sup>

巡礼者は、慰霊塔・碑の前で行われる死者供養や

慰霊祭といった、儀礼空間の中ではじめて、「戦死者が死んだ」という事実を受け入れることができるようになった。それはつまり、死者の不在を前提とした新しい世界秩序の再編成であり、「生まれ変わり」「死と再生」の体験であったと理解することができるだろう。遺族と死者との関係性は更新され、新たな「自己」が獲得されたのである。ある遺族は、その自己変革、「よみがえり」の体験について、次のように記した。「沖縄巡拝に参加して、私は全く精神的に立ち直つたのです。一度は、夫を失つた精神的打撃、心のキズは仲々（ママ）癒えずひとり苦しんでいましたが、こうした機会に初めて我が夫の眠れる沖縄の地を踏んでみて、心のゆとりが得られ、ほんとうに別人のように変つた自分自身をふりかえり我ながら驚くばかりです」<sup>39</sup> 巡礼者は、戦死者と出逢い直したのである。

慰霊塔・碑の周囲では、そこかしこで「塔の横にわずかに残る骨灰を拾い、名もない野草を手折り、せめてもの土産にと付近の小石を拾う姿」（『北海タイムス』1954年4月5日）が見られた。遺族たちは、自らのため、在郷遺族のために戦跡の石や土や砂を拾った。彼らは、あらかじめ北海道に居残った遺族から、それぞれの戦死者の遺骨や遺品の収集を委託されていた。それがかなわなければ、「せめて沖縄の石の一かけらでも砂の一握りでも」（『琉球新報』1954年4月4日）持ち帰ることを期待されていたのである。それは、相見ることのかなわぬ肉親の遺骨の代わりであり、その死の証であった。

巡礼者が沖縄に持参した供物や遺品などは、死者との関係の唯一性を具象化するものであったが、同時に、死者との凍結された関係性（つまり死者が生きているものとしてあり続けている状態）を象徴的に示すものでもあったと考えられる。巡礼者は、儀礼の過程を経て、それを沖縄の地に置き去りにし、その死を儀礼的に追認したのである。それとひきかえのようにして、前述したように、戦跡地の石や草花が、戦死者の換喩として持ち帰られた。つまり、それは死者の死の徴であり、新たな自己変革の証であり、生者と死者の新しい関係性の象徴として記念されるべきものであったといえよう。そして、在郷遺族にとっては、戦死者がどのような場所でもどのように死んだかという巡礼者の報告と、その新たな「自己」の徴に触れることこそが、巡礼の記憶を分有

することにつながったのである。

## V. おわりに — 戦死者に「出逢う」ということ

まず、表1を見てもらいたい。巡礼旅行総体としては、どちらとも、観光的な要素を抜きにしては語れないことが分かるだろう。1954年の事例は、現地滞在中の行動にかなり制限があったこともあり、現地での観光は少ないが、往復の行程において神戸、長野、京都を訪れているように、観光旅行としての側面も存在した。1995年の事例では、沖縄本島滞在中においても、中北部の観光が行われているし、本島以外に八重山観光も含まれている。

中南部戦跡や縁故地の巡礼、慰霊祭といった旅程の基本的要素にそれほど相違はない。しかし、両者は、「分離」と「再統合」における儀礼において大きく様相を異にする。1995年の「結団式」や「解団式」は、式というより団長の挨拶が行われた程度のものであったようであり、かつてのように多数の見送りの人々の姿も見られなかったようだ。近年では、結団式（分離の儀礼）や解団式（再統合の儀礼）は形骸化している。もはや日常と非日常の区分がそれほど明確ではないことが理解できよう。

もっとも今の沖縄は、飛行機で数時間の地であり、「外国」でもない。物理的・心理的距離が、比較にならないほど近くなった上、今や「南の癒しのパラダイス」としてのイメージがすっかり膾炙している。そのような地に赴くに当たって、「日常空間と時間から一時脱却し、非日常時間、空間に滞在し、神聖性に近接し、再び日常時空に復帰する行動で、その過程にはしばしば苦行性を伴う」<sup>40</sup> ようないわゆる「巡礼」を、期待すべくもないだろう。ターナーは、日常生活の支配的秩序たる「構造」(structure)とそこからの解放である「コミュニタス」を対置させ、前者(中心)と後者(周縁)の往還運動にこそ巡礼なるものの核心があると考えた。しかし、現代の「沖縄戦跡巡礼」は、限りなく「構造」化された日常的文脈の中に位置し、「死と再生」のドラマを体験させるようなコミュニタス性とは無縁になりつつある。

戦後60年余り経過し、戦死者と直接の関わりをもった遺族の大方が世を去ったせいも、現在の戦跡巡礼(観光)では、往時の直情的な悲哀の表出をみることもほとんどなく、そこには、ある種の静謐さ

表1 1954年と1995年の北海道沖縄戦遺族による戦跡巡礼の比較

	「第一回沖縄巡拝と慰霊の“北霊碑”建立団」	平成7年度「沖縄現地戦跡慰霊巡拝団」 <sup>(i)</sup>
旅程	1954年3月25日～4月14日(20泊21日)	1995年11月16～20日(4泊5日)
沖縄本島滞在日数	3泊4日(4月2～5日)	3泊4日(18日のみ、八重山観光)
主催団体	北海タイムス社	北海道連合遺族会
遺族参加者人数	22名	82名
同行者	3名(新聞記者)	3名(遺族会関係者)
費用 <sup>(ii)</sup>	38500円	136000円
沖縄までの交通手段	列車と船	飛行機
現地宿泊先	船中泊	ホテル泊
沖縄本島滞在中の行程概要	第1日目	南部戦跡巡礼
	第2日目	中部戦跡巡礼、首里博物館見学、「北霊碑」にて「除幕式並びに慰霊祭」、植樹
	第3日目	3つのグループに分かれ「縁故地巡拝」
慰霊祭の内容	読経、除幕式、帛辞、焼香、挨拶	国歌斉唱、黙祷、追悼の辞、献花、沖縄舞踊奉納、謝辞
観光地	沖縄民政府立首里博物館、神戸、長野、京都	沖縄本島中北部観光地、八重山(石垣島、竹富島)
結団式・解団式等の有無	札幌駅にて壮行式、帰国報告式。札幌顕徳神社にて「北霊碑入魂式」、札幌西本願寺にて「戦没者慰霊追悼会」	千歳空港にて結団式、解団式 (団長が簡単に挨拶する程度の内容)

(i)1995年の項目については、北海道連合遺族会の会報『遺族会報』第567号、1995年12月20日発行より作成。(ii)なお、参考までに、大卒銀行員の初任給額を示せば、1954年が5600円、1997年が17万円である[『日本の物価と風俗130年のうつり変わり』文教政策研究会、1996、参照]。

さえただよう。今では戦死者の子どもの世代(遺児)すら、60の齢を過ぎている。戦死者の親の世代はとうに世を去り、かろうじて生前の戦死者の姿を良く知る兄弟の参加者の姿さえ、まばらになりつつある。さらには、戦後50周年を過ぎた頃から、遺族・戦友の高齢化により、遺族会や戦友会による沖縄への戦跡巡礼の多くが、その規模を縮小させてきている。遺族という枠の中での戦跡巡礼が、孫の世代まで受け継がれることはないだろう。

かつての戦跡巡礼者は、巡礼路たる戦跡に戦争と死の痕跡が満ちていたからこそ、「遺族のコミュニティ」という「個別の戦死者と関わり合う場」の中で、戦死者と「立ち合わせられる」瞬間を得ることができた。それでは、沖縄の戦跡は、もはや戦死者に「否応なく立ち合わせられる」場とはなりえないのであろうか。そこは、しばしばいわれるように、観光地化してしまった、「戦争」と「平和」の展示場に過ぎないのであろうか。最後に、戦死者に「出逢う」場としての沖縄戦跡の可能性について触れて論を閉じたい。

現在、沖縄には、県外から年間30万人以上の修学旅行生が訪れる。そして、その内約6割が、「平和ガイド」の案内で、ガマ(自然洞窟)などの戦跡を巡り、平和博物館・美術館の見学、沖縄戦体験者の講話などの「平和学習」を受けて帰る。拙論にて詳述

したが<sup>34)</sup>、70年代以降、沖縄の戦跡は、「慰霊空間」(「霊域」)から「平和の聖地」へと場の意味を変転させ、そこを巡る人々の実践の中核は、「戦跡巡礼」から「戦跡巡り」へと移り変わった。

それでは、このような現代の戦跡巡りににおいて、個別の死者に出逢うことは可能であろうか。ここでは、そのような出逢いを可能にする場の一例として、「ひめゆりの塔」のすぐ側にある「ひめゆり平和祈念資料館」の第四展示室(ひめゆり学徒と教師200余名の遺影が飾られた「鎮魂」の空間)を挙げたい。

「鎮魂」の部屋の壁一面に張り巡らされた学徒たちの顔、顔、顔。訪問者は、その圧倒的な存在感の前にしばし立ちつくさずには居られない。壁の所々には空白がある。写真が残っていない名前だけの学徒たちだ。その不在が見るものを余計いたたまれない気持ちにさせる。「慰霊巡拝」に訪れる遺族とは異なり、「観光」や「学習」で戦跡や平和博物館を訪れる者にとって、これらの戦死者は縁故者ではない。しかし、だからこそというべきか、そこには無限の可能性が宿っているように思われる。

修学旅行で資料館を訪れたある女子高校生は、学徒ひとりひとりの死の固有性に触れ、見学直後にこう書き付けている。

人は一人死ぬと悲劇ですが、千人死ぬと数にすぎない、と聞いたことがあります。しかし、このように一人一人の体験をまざまざと見せつけられてしまうと、もう一度根底から考え直さなければならぬような気がします。気が狂いそうです。<sup>42</sup>

そのような気づきを得て始めて、抽象化された「戦没者」は、ひとりひとり固有の顔を持った「戦死者」へと変わる。それは、哲学者ジャンケレヴィッチのいう「三人称の死」を、どう「二人称の死」に引きつけて捉えることができるかということでもあろう<sup>43</sup>。沖縄の戦跡、ここは今も戦死者の死の固有性にめぐり逢う、巡礼の地なのである。

## 註

- 1 『戦死者のゆくえ；語りと表象から』（川村邦光編著、青弓社、2003）には、戦死者の慰霊空間／実践に関する論考が多数収められている。戦死者の慰霊／追悼に関しては、靖国神社問題との関わりで論じられることが多いが、ここでは近年発表されたもののみ挙げておく。赤澤史朗：「戦争犠牲者の追悼と靖国神社」、『歴史評論』、2002、628、丹波書林、2-14頁。波田永実：「国家と慰霊—日本遺族会と靖国神社をめぐる戦後の諸問題—」、『歴史評論』、2002、628、丹波書林、15-27頁。菅原伸郎編：『戦争と追悼；靖国問題への提言』、八朔社、2003。国際宗教研究所編：『新しい追悼施設は必要か』、ペリかん社、2004。戦死者祭祀に関しては、以下を参照のこと。今井昭彦：「近代日本における戦没者祭祀—札幌護国神社創建過程の分析を通して—」、谷口貢：「戦没者の慰霊と民俗信仰—福島県会津高田町の事例を中心に—」（両篇共、松崎憲三編：『近代庶民生活の展開—くいの政策と民俗—』、三一書房、1998、所収）。田中丸勝彦：『さまよえる英霊たち；国のみたま、家のほとけ』、柏書房、2002。岩田重則：『戦死者靈魂のゆくえ；戦争と民俗』、吉川弘文館、2003。戦死者の慰霊空間に関する研究は、以下。本康宏史：『軍都の慰霊空間；国民統合と戦死者たち』、吉川弘文館、2002。戦跡巡礼（巡拝）について触れた研究は少ないが、以下の論考の中で、遺族・生還者によるフィリピンへの戦跡巡拝や慰霊碑建立が検証されている。中野聡：「追悼の政治—戦没者慰霊問題をめぐる日
- 本・フィリピン関係—」、池端雪浦／リディア・N・ユウ・ホセ編：『近現代日本・フィリピン関係史』、岩波書店、2004。
- 2 前掲岩田論文、1頁。
- 3 以上、引用部分は、川村邦光：はじめに—『戦死者のゆくえ』に向けて（前掲『戦死者のゆくえ；語りと表象から』所収、9-22頁）より。
- 4 戦死者遺族による戦跡地の訪問旅行は、「巡拝」「巡礼」「慰霊」「墓参」などの表現を組み合わせ様々に呼び習わされていた。本論では、総称として「戦跡巡礼」に統一し、文脈に応じて用語を適宜使い分けていくことにしたい。なお附言しておけば、部外者の視点からすれば、それは、「戦跡観光」に過ぎず、遺族たちは、「観光客」に他ならなかった。
- 5 北海道沖縄会編：『北海道沖縄会四十年史』、北海道沖縄会、1993、620頁。
- 6 同上、632頁。
- 7 V. W. ターナー（富倉光雄訳）：『儀礼の過程』、新思索社、1996（Turner, Victor W., The ritual process: structure and anti-structure. Chicago: Aldine Pub. Co., 1969.）。ヴィクター・ターナー（梶原景昭訳）：『象徴と社会』、紀伊國屋書店、1981（Turner, Victor W., Dramas, fields, and metaphors: symbolic action in human society. Ithaca: Cornell University Press, 1974.）。
- 8 アルノルト・ファン・ヘネップ（綾部恒雄・綾部裕子訳）：『通過儀礼』、弘文堂、1995。
- 9 前掲7、紀伊國屋書店、1981、173頁。
- 10 「第十三回国会衆議院海外同胞引揚及び遺家族援護に関する調査特別委員会議録」第十二号（昭和27年4月22日）。
- 11 牛島満第32軍司令官や大田実海軍司令官といった高級将校の遺骨は、比較的戦後早い時期に返還された。
- 12 これは、沖縄県以外の都道府県の戦死者総数（75,941名）の、約14.2%に及ぶ。北海道出身者の沖縄戦参戦者数は、約一万二千人という説もあり、この数字が確かだとすれば、実に9割近くの人命が失われたことになる。
- 13 前掲5、610頁。
- 14 同上、607頁。
- 15 同上、615頁。
- 16 野田正彰：『喪の途上にて；大事故遺族の悲哀の

- 研究』、岩波書店、1992、12頁。
- 17 以後、各都道府県は、競い合うようにして沖縄本島南部に慰霊塔を建立した。結果、摩文仁の丘は、「慰霊塔の団地」と呼ばれるまでに、「観光地化」していった。1960年代の慰霊塔建立ブームについては、以下拙稿参照。北村毅：「沖縄戦跡の〈表通り〉と〈裏通り〉—〈沖縄戦記録／継承運動〉の源流—」、『ヒューマンサイエンス リサーチ』、早稲田大学大学院人間科学研究科、13、2004。
- 18 前掲5、606頁。
- 19 北海道遺族団巡拝者名簿（『沖縄タイムス』4月2日）等より算出。
- 20 他に以下を参照。沖縄県遺族連合会：『還らぬ人とともに』、沖縄県遺族連合会、1982。1983年6月23日～7月21日の『北海タイムス』連載記事（「沖縄北霊碑秘話」）。
- 21 北海道慰霊団の滞在日程は、琉球遺族連合会、沖縄観光協会、琉球海運会社、三者の協議により組まれた（『沖縄タイムス』4月1日）。
- 22 23名の戦死者の内、8名が首里近辺（那覇市）、8名が喜屋武半島（糸満市）で亡くなっており、残りの7名は戦死地点が不明（「沖縄」とあるのみ）である。
- 23 北霊碑は、1972年と1996年に改修された。写真は、初代の碑で、元北海タイムス社記者清水幸一氏が、1964年頃頃撮影したもの。
- 24 青木保は、同論文の中で、日本における巡礼を「参詣型」と「遍路型」に分類している。「参詣型」とは、伊勢参りや熊野詣でのように一箇所の聖地を目指して行われるものであり、それに対して「遍路型」とは、四国八十八箇所遍路のように複数の聖地（霊場）を巡り歩くものである。戦跡巡礼は、沖縄をひとつの聖地とみなせば、そこに到達するまでの「参詣型」といえるだろうが、沖縄に到着し、その中で数々の戦跡を巡礼する段においては、「遍路型」というべきものになるだろう。戦跡巡礼は、両方の特徴を併せ持つ複合的な巡礼形式といえようか。
- 25 青木保：「現代巡礼と日本文化の深層」、山口昌男編：『見世物の人類学』、講談社、1983、111頁。
- 26 1960年の日本遺族会主催の「第5回沖縄戦跡巡拝団」（参加者84名中、北海道からは46名）、1964年の北海タイムス社主催の「沖縄慰霊巡拝団」（約130名が参加）など。
- 27 前掲9、165頁。
- 28 前掲9、165頁。
- 29 沖縄県遺族連合会青壮年部：『若竹総集編（創刊号～第19号）』、沖縄県遺族連合会青壮年部、1985、87頁。
- 30 同上。
- 31 山折哲雄：「巡礼の構造」、真野俊和編：『巡礼の構造と地方巡礼』、第3巻、雄山閣、1996、5頁。
- 32 遺族会館などで、解団の懇親会（パーティー）が行われ、在郷の関係者と巡礼者が飲食を共にすることもある。
- 33 魂魄之塔の遺骨は、「国立沖縄戦没者墓苑」に転骨され、現在その中は若干の象徴遺骨を残すのみである（詳しくは、前掲拙稿参照）。萬華之塔には、未だ遺骨が収納されている。
- 34 北海道沖縄会編：『会報第8輯』、北海道沖縄会、1968、27頁。
- 35 1965年6月の北霊碑慰霊祭では、郷土からの持参品ではないが、沖縄の漁業組合から提供を受けた1トンの氷片を郷土の降雪に見たて、42名の北海道遺児が北霊碑にふりかけたりしたこともある。
- 36 1964年11月26日、30日、12月1日、12日付け『北海タイムス』を参照。
- 37 北海道沖縄会編：『会報第4輯』、北海道沖縄会、1965、22頁。
- 38 日本遺族会編：『感想文集—第5回沖縄戦跡巡拝』、日本遺族会、1960、52—3頁。
- 39 前掲37に同じ。
- 40 星野英紀による巡礼の定義。以下参照。星野：『巡礼；聖と俗の現象学』、講談社、1981、62頁。
- 41 前掲17拙稿参照。
- 42 ひめゆり平和祈念資料館編：『感想文集ひめゆり第14号』、同資料館、2003、59頁。
- 43 V. ジャンケレヴィッチ（仲沢紀雄訳）：『死』、みすず書房、1978。